

2014 年度
社会医学研究会
活動報告

顧問からのメッセージ

社会医学研究会は奈良県立医科大学の中でも伝統のあるクラブで、様々な活動を行っています。喜ばしいことに年々活動の幅が広がり、現在は「てくてくの会」「みのむしの会」「手話の会」「ホスピスボランティア」「花の家」「幼稚園ボランティア」「AMSA」「IFMSA」「ぬいぐるみ病院」「小児科病棟個別指導ボランティア」など10にもわたります。ボランティア活動では相手の気持ちがわからないとうまくいきません。つまり、患者さんや子供そして親の気持ちが理解できること、これは将来の医師や看護師にとっても重要なことです。社医研の活動を通して皆さんは学生時代に他のクラブではできないきわめて貴重な体験をしています。初めは、何を話していいのかわからないとか、思ったように反応してくれないとかとまどうことも多いと思います。でも先輩を見習って、決してあきらめずそれぞれの活動を継続してほしいと思います。そのうちに反対に患者さんや子供たちからたくさんエネルギーをもらっていることに気がつくはずです。国際的な交流も重要な社医研の活動です。日本人の学生や医療従事者はまだまだ国際力が低いと日頃感じています。学生のときから積極的に語学力を磨いて海外の人と議論できるように頑張してほしいと思います。

奈良県立医科大学
小児科学教室
教授 嶋 緑倫

AMSA 活動報告

医学科 5 年 阪田武

◆AMSA とは？

AMSA: Asian Medical Students' Association (アジア医学生連絡協議会) は 1985 年に設立された学生 NGO であり、アジアの保健医療の向上とヒューマンネットワークの構築を目的に活動しています。AMSA では年に 2 回の国際会議と交換留学を行っています。また、AMSA はアジアを中心に 24 の支部を有し、AMSA Japan もその支部の一つです。AMSA Japan では、支部として独自に国内交流会、会議の報告会、他団体との共催イベント、新歓、追いコンを行っています。現在、AMSA Japan には約 360 名の正会員と約 900 名のメーリングリスト会員がいます。

◆2013 年 10 月から 2014 年 11 月までの主なイベント活動

1. 秋の国内交流会 in 島根

2013 年 11 月 23, 24 日(土, 日)に秋の国内交流会が島根で開催されました。「国際保健と国際協力～緊急の医療支援から長期のものまで～」をテーマとし、ワークショップや講演が行われました。

1 日目には、「水の大切さを知ろう!」「経口補水液を作ろう!」「緊急支援ワークショップ」と 3 本立てのワークショップが行われました。最初のワークショップでは水 200ml でどれくらい汚れた手をきれいにできるか体験し、次のワークショップでは経口補水液を実際につけて飲み、国際保健における「水」の役割について考えました。緊急支援ワークショップでは、災害時にどのような対応が必要なのかについて具体的に話し合いました。

2 日目には、加藤寛幸先生にご講演をいただき、その後、国際問題について考えるワークショップを実施しました。加藤先生のご講演では、国境なき医師団の活動や、先生ご自身が活動の中で体験されたことを伺い、国際医療協力について考えることができました。その後のワークショップでは、シリアの問題を扱い、政治・経済・宗教・文化の面から国際問題について深く学びました。

2 日間の短い交流会ではありましたが、全国から熱意ある学生が集い、学び、交流することができました。

2. 東アジア医学生会議 in South Korea

2014 年 1 月 12 日～16 日の日程で韓国にて第 27 回東アジア医学生会議が開催されました。アジアを中心に 15 の国・地域から約 400 名の学生が一堂に会し、基調講演、プレゼンテーション、ディスカッション、観光といったプログラムを通して、学術交流、文化体験をしました。日本からは 29 名の学生（うち奈良医大 4 名）が参加し、海外の

学生と共に非常に濃密な5日間を過ごしました。

今回の国際会議のテーマには慢性疾患が取り上げられており、基調講演では、2型糖尿病、アテローム動脈硬化症、メタボリックシンドロームについてのお話をいただきました。会議期間中、論文、ポスター、ヘルス・キャンペーンの3つのコンペティションが行われ、日本は、統合失調症によるひきこもりをテーマに、医学生として問題意識をもち、正しい理解を広めるための役割を発表しました。また、ソウル市の病院見学や街中に設けられたブースで血圧、血糖、BMIの測定やエクササイズを市民と共に行う社会還元プログラムもありました。

参加者はそれぞれ20人ほどのグループに分かれて5日間を過ごし、海外の学生と観光や韓国の食事を楽しみました。初日はお互いの名前を覚えるところから始まりましたが、すぐに仲良くなることができました。海外に得た友達は貴重な財産です。

3. AMSA会

3月22, 23日(土, 日)、京都大学にてAMSA会が開催されました。50人を超える方々にご参加いただき、役員による企画、卒業生発表、OGの方による講演を楽しんでいただけました。2日間を通じた「夢企画」では、年度の節目に過去を振り返り、未来への橋渡しができました。「Professional 仕事の流儀」は、数々の経験を積まれた卒業生の思いの詰まった講演でした。

4. 新入生歓迎イベント

2014年は九州、関東、中四国、関西において、AMSA Japanの新歓を実施しました。新歓では、AMSA Japanの紹介をすると共に、「夢について考える」ワークショップを行い、自分の夢を実現するために大学で何ができるのか、AMSAに入れば何ができるのか、参加者の皆様と考える機会を設けました。

5. 春の国内交流会 in つくば

6月21, 22日(土, 日)に春の国内交流会が筑波大学で開催されました。全国から医療系学生が40名以上集まり、テーマである「放射線のがん治療」について理解を深めました。今回の国内交流会は大きく三つのセクションに分かれていました。

①「放射線について正しい知識を身につけ、説明できるようになろう」では、筑波大学の高田先生より「放射線についての基本的な話」の講義をしていただきました。その後、ワークショップを行い、グループごとに放射線に関する患者が抱きそうな疑問に対してどのように説明するかを考えました。

②「患者さんの背景を知り、最善の医療を提供できる医療者になろう」では、つくばpinkリボンの会の乳がん闘病者の方2名のお話を伺いました。患者さんから私たち学生へのアドバイスで印象に残った言葉に、「患者さんに何かを説明するときは、専門用

語ばかり使うのではなく、何かに例えながらわかりやすく説明してほしい」というのがありました。その後、2つ目のワークショップを行いました。がんと告知された患者とその家族に関するシナリオをもとに、それぞれの立場になって何ができるか議論しました。翌日に行われた3つ目のワークショップでは、がん治療を拒む患者さんとその家族に関するシナリオをもとに医療者として何ができるかを考え、グループごとに劇という形式で発表しました。

③「筑波から伝える放射線の最前線」では、筑波大学の石川先生より「放射線治療の進歩と陽子線治療の展望」の講義をしていただきました。その後、まとめのワークショップとして、この2日間印象に残ったことを各自カードに書き、グループで共有しました。

今回は先生方のご協力により筑波大学附属病院にある陽子線センターの見学に行くことが出来ました。1日目の夜は懇親会を行い、他大学の学生との交流を深めることが出来ました。また、2日目の交流会終了後は希望者でつくばのサイバーダインスタジオへ行き、ロボットスーツ HAL の体験をしました。

6. ALSA×AMSA コラボ企画～人口妊娠中絶～

6月28日(土)にALSA×AMSA コラボ企画～人工妊娠中絶～が神戸大学で開催されました。本イベントは、法学生団体であるALSA Japanと、医療系学生団体であるAMSA Japanの共催企画であり、両団体の協定に基づいて実施されました。医学、法学の学生だけでなく、看護、薬学、政治経済を学ぶ学生など、全国から39名もの学生に参加いただきました。イベントのテーマは「人工妊娠中絶」であり、命の始まりをめぐる多くの議論が交わされました。

医療系学生にとって普段耳にしない法律や罪を考えるのは難しく、一方、法学生にとっても妊娠、出産、診断などの医学は難しいものでした。しかし、互いに教え合うことで理解を深め、ディスカッションはとても熱いものとなりました。本イベントではプログラムの最後にグループワークを行い、参加者が学んだことを世間に発信するポスターの作成を行いました。

7. 第2回 ALSA×AMSA コラボ企画～先進医療と法制度～

10月18日(土)、京都大学にて2回目となるALSA Japanとの企画を実施しました。医と法双方からのアプローチにより、テーマの「先端医療と法制度」について学びました。国民皆保険制度や混合診療、臨床試験についてのレクチャーとディスカッションを組み合わせたプログラムで、学びが深まったと好評でした。前回仲良くなった参加者との再会を喜ぶ姿も多くみられ、終始和やかな雰囲気イベントとなりました。

8. 秋の国内交流会 in 岡山

11月29, 30日(土, 日)に秋の国内交流会が岡山大学と長島愛生園を会場に開催されました。全国各地から医療系学生が集まり、大いに盛り上がった2日間でした。

今回のテーマは「無知から来る差別」。「見た目問題」について専門の講師をお呼びし、講演とワークショップを通して理解を深めました。また、「ハンセン病」の療養施設を訪問し、フィールドワークを行いました。

1日目は、差別の意味を考えるワークショップを行い、その後、「見た目問題」の講演をNPO法人 My Face My Style 代表の外川さんよりいただきました。当事者の声や、代表自身の考えなど貴重なお話を伺うことができました。講演の後は、実際に自分たちが差別や偏見の場に遭遇したら、どのように対応すれば良いのかを、「アルビノ患者」など4つの例を用意してディスカッションしました。各班は差別偏見問題の解決を目指し意見を出し合っていました。

2日目は長島愛生園を訪問しました。長島愛生園は、かつてのハンセン病療養所、そして今は地元に戻れない元ハンセン病患者が暮らしている施設です。過去差別の対象となったハンセン病を通して、差別がどうして生まれるのかについて考えました。

岡山での2日間を通して、「考える→見る、感じる」の順で「無知からくる差別」について考えました。また、1日目の夜には懇親会があり、初対面の人も仲を深めることができました。

(以上文責：阪田武)

◆2014年の交換留学

7月19日(土)から26日(土)にかけて、AMSAを通じた交換留学:AMSEP(Asian Medical Students' Exchange Program)が奈良医大にて行われました。シンガポールから2名、台湾から3名の留学生を迎え、病院見学やワークショップなどの学術的なものだけでなく、奈良・京都観光や夏祭り、温泉にカラオケなど様々なプログラムを通して、1週間親睦を深めることができました。また、8月下旬にはシンガポールへ2名、台湾へ4名の留学生の派遣が行われました。

(文責：堀江きよみ)

IFMSA 活動報告

医学科 3 年 上田和也

IFMSA (イフムサ) とは？

International Federation of Medical Students' Associations (略称: IFMSA、日本語名: 国際医学生連盟) は、医学生による非営利・非政治の国際 NGO で、第 2 次世界大戦後の 1951 年にヨーロッパで設立され、本部をフランスの世界医師会内に置いているワールドワイドな団体です。2014 年 3 月時点で、116 の国と地域から 123 団体が加盟し、120 万人以上の医学生を代表しています。日本国内では医学部・医科大学の ESS や医療系サークルなどの団体会員、および個人会員によって構成されており。2014 年 4 月現在、団体会員 53 校、個人会員約 1000 名、IFMSA-Japan の中で最大のメーリングリストには 3000 名以上が参加しています。主な活動内容は臨床交換留学、基礎研究交換留学、公衆衛生、性と生殖・AIDS、人権と平和、医学教育の 6 つの分野に分かれており、世界各国で様々なプロジェクトやワークショップを運営しています。具体的な活動は、例えばイフムサに加盟している大学同士で毎年交換留学したり、性教育の普及のために高校にいった講演会をひらいたり、公衆衛生の勉強のために実際にインドネシアやザンビアに行ったり、法学生との医療社会問題についてとことん議論したり、医学教育の向上のために日々活動している人もいます。しかしこれらの活動はほんの一端で、イフムサでは個人個人がそれぞれ思い思いの活動をしており、とても紹介しきれないので、興味のある方はホームページをご覧ください→<http://ifmsa.jp/>

みのむしの会

医学科3年 本橋和也

みのむしの会は発達障害を持つ子どもたちと、その家族のための会です。月に1回、生駒市の福祉施設などに集まって活動しています。障害をもった子どもやご家族、養護学校の先生、小児科の先生、動作法の先生、訪問看護師、学生などが集まり交流しています。学生は奈良県立医科大学社会医学研究会と奈良女子大学わかたけ会から参加します。活動内容はご家族が話し合いや先生との相談、子どもたちが動作法の訓練をしている間、輪に入って話し合いに参加したり担当でない子どもたちと遊んだりすることです。

一般の学校に進学させるか養護学校に進学させるか、養護学校を卒業後はどうするか、などの私生活に関連した悩みを相談される方が多いように感じます。子どもたちの成長は早く、身長が伸びることはもちろん文字の読み書きができるようになったり折り紙を教えてくれたり、とても頼もしいです。「ボランティアの学生と子ども」という視点だからこそ、医師になってからの「医師と患者」という関係では診られない視点から体験できます。症状という概念にとらわれず、されど将来向き合わないといけないことだと知った上で子どもたちと接することができる機会というものは大変貴重です。

また、夏には1泊2日でキャンプ、冬にはクリスマス会があり、学生が出し物をすることもあります。夏のキャンプでは子どもたちと精一杯遊んだ後一緒にお風呂に入り、夕飯→宴会とイベントが盛り沢山です。今年度のキャンプでは流行りのアニメ「妖怪ウォッチ」の主題歌を子どもたちと練習し一緒に踊りました。宴会後の座談会では、普段の活動中にはあまり聞くことのできない深い悩みについて知ることもあります。冬のクリスマス会ではサンタクロースに扮した学生が子どもたちにお菓子を配り、クリスマスソングを子どもたちと歌います。

普段の活動ではあえて「今回なにを学ぶのか」「どういった目的で参加するのか」などを決めず自由に交流しています。その中でどう振る舞うのか、なにを身に付けるのかは個人に委ねられていて、思うままに時間を過ごしています。こういった放任主義的なところも、みのむしの会ならではの魅力だと思います。

てくてくの会

医学科 2年 堀江きよみ

てくてくの会は京都の木津川市にある東部交流会館にて月一回、第4日曜日に活動しています。会にはどんな子でも参加可能で、「健常」「障がい」の区別なく、また障がいの種類・程度での区別もありません。普段の会では、集まった子どもたちはお母さんやお父さんと一緒に「音楽あそび」を主にします。音楽あそびとは、皆で童謡を歌ったり、そのリズムに合わせて体を動かしたり、または簡単な楽器を演奏してみたりすることです。1年を通して季節に合わせたイベントも開催され、例えば遠足、夏祭り、運動会、クリスマス会などがあります。

私たち学生ボランティアの活動内容は、主に会場の設営・片付けをお手伝いしたり、子どもたちと一緒に音楽あそびやイベントを盛り上げたりすることです。また、会の後にお母さんやお父さんが他の親御さんもしくはスタッフと、悩みを語り分かち合い、情報交換し、そしてリフレッシュできるように、学生は子どもたちと外で鬼ごっこや隠れん坊などをして遊ぶこともあります。

この約2年の間、私は何度かてくてくの会に参加し、遊びに来る家族さんたちと関わらせていただきました。昨年12月のことです。ある女の子が、皆で音楽あそびをするのが照れ臭いのか独り輪から外れて見ていて、私は何度もその女の子と一緒に戻ろうと誘いに行きましたが、嫌がられてしまいました。それを見た会のスタッフさんに「ほっとき、ほっとき。」と言われて、思い出したことがあります。1年生の4月に初めて、てくてくの会に参加した時に、ボランティアの際の注意点として、「子どもが怪我をしないように気を付ける」等の基本的なこと以外に、「輪から外れた行動をとる子どもを手を引っ張るなどして無理やり引き戻してはいけない、暫く付き合った後さりげなく皆がやっていることに注意を向けられるように努める」とおっしゃっていたということ。てくてくの会は、小さな子どもが、お母さんの手を握りながら、てくてく歩く姿をほほえましく思い、病気や障がいがあっても家族の手と手をしっかりとつないでゆっくり着実に前へ進んでいけるように…と願い誕生したそうです。てくてくの会の主役は子ども達とその家族で、スタッフや私たち学生ボランティアが出来るのは、みんながてくてくとゆっくり、でも確実に成長の道を歩いていけるよう、「サポート」すること。「ほっとき。」というのは、無理やり連れ戻すのではなく、その女の子と家族が自分たちの歩幅で歩いていけるように見守る、という意味だったのかもしれませんが。これからもてくてくの会を通して、子どもたちの成長を見守り、サポートしていくことができればと思います。

ホスピスボランティア

医学科 2 年 中森滉二

ホスピスボランティアは田原本にある国保中央病院の緩和ケア病棟『飛鳥』で月に一度のペースで活動を行っています。ホスピスとは治療が困難となった終末期の患者さんをひとりの人間として尊重し、人生の質(QOL)を維持・向上させるための施設です。ホスピスでは患者さんが残された時間をゆったりと過ごせるような空間が作られています。

私たちは学生ボランティアとして、ホスピスが患者さんにとってより過ごしやすい空間となるようにお手伝いをさせていただいています。具体的な活動としては、リビングルームの大きな窓に季節ごとの飾り付けをしています。春には桜、夏には海水浴、秋には紅葉やハロウィン、冬にはクリスマスやお正月などの飾り付けをしました。患者さんやそのご家族の方から『かわいい飾り付けやね。』などと褒めていただくととてもやりがいを感じます。8月にはホスピスの夏祭りのお手伝いもさせて頂きました。この夏祭りはホスピスに入所している患者さんとそのご家族の方々を対象に、ホスピスの中庭やホールで様々な催し物が開かれます。今年はヨーヨー釣りやアイスクリームのコーナーをお手伝いし、多くの方に楽しんで頂きました。また、今年度からは誤嚥の恐れがあるということでハーブティーの提供を辞めることになりました。その代替りの活動として、カレンダー作りを行おうかと考えております。

病院という施設では、患者さんと家族以外は医療の専門家です。そのような日常生活からかけ離れた空間では、患者さんは医療者の想像以上の緊張を抱えています。そこに”適度に素人な人”としてボランティアがいれば、ささやかなことしかしていなくても、患者さんに安心感を与えることができると考えて活動をしています。

医療者自信のメメント・モリ（死を想うこと）や、いのちとは？という問いかけは、医療という科学の分野に留まらず、文化的、宗教的、社会的学びへと広がります。その広がる学びがあつてこそ、私たちは厳しい臨床の現場をひとつひとつ大切に抱えながら、病む人と家族をケアし、自分自身も燃え尽きないで働き続けられる強さを身に付けられるのではないのでしょうか？これらを体験し、学ぶ手段の一つがホスピスボランティアだと思い、私は活動に参加しています。

ホスピスボランティアでは月の初めに参加希望者の予定を聞き、それに合わせて活動日を決めています。少しでも興味のある方は、是非参加してみてください。

花の家ボランティア

医学科 5 年 南里直実

花の家は橿原神宮前駅から徒歩 3 分の場所にあるデイサービス施設です。時間は火～土曜の 10 時から 16 時半頃なので、私たちは主に授業のない土曜日を中心に活動してきました。

花の家の活動は 2011 年 3 月から始まりました。活動の開始には奈良県立医大 地域健康医学教室教授の車谷典男先生や当時橿原市役所 橿原市民協働課 課長補佐でいらした辰井保千代さんなど多くの方のご協力を頂きました。奈良県橿原市に建つ奈良県立医大に属するものとして、橿原市民と直接関わり合いを持ち、できれば助け合うことができるような活動をしたいというお二人の想いを、学生が引き継がせていただき形になったものです。

学生側としても、奈良県立医大に通っていても、橿原市民の方々と直接触れ合う場が少ないと感じている人がいました。花の家は、地域に根差した介護サービスを行っておられ、そこでの活動を通じて、地域の方と関わる事が出来ます。

ボランティアでは、利用者であるおじいちゃんおばあちゃん方と一緒に、お話をしたり、ゲームをしたり、ご飯を食べたり、体操をしたり、歌を歌ったりしています。認知症専門の施設も併設されており、学生は、一般の方の施設に行くか、認知症専門の施設に行くかを毎回選びます。一般の方の施設では、麻雀を教えていただいたり、紙風船バレーで白熱したりしています。認知症専門の方の施設では、何回も同じお話を繰り返す、自称あわてん坊将軍のおばあちゃんがいるそうです。和やかな雰囲気の中で、リアルな介護の現場を体験させていただいています。

利用者の方とお話をする中で、昔の経験や、生活の中で困っていることなどを聞く事が出来ます。また、スタッフの方と利用者の方とのやりとりから、お年寄りの方とのコミュニケーションの取り方を少しずつ学んでいます。

花の家の所長の濱田しま子さんは、「継続して花の家に行くことで、利用者の方と信頼関係を築いていくことが大切で、そうして初めて上手にコミュニケーションをとることが出来る。将来、医師・看護師になった時に、患者さんとして来られたお年寄りの方と上手にお話をする練習をしてほしい。」と、おっしゃっていました。

このような機会に出会えたことは本当に素敵なことだと思います！今年も一度も参加することができませんでしたが、続けて参加してくれている 1 年生や 2 年生の子からお話を聞いて、花の家の方たちと現在も繋がっていることを嬉しく思っています。これからも継続して活動していきたいと思います (*^~^*)

ぬいぐるみ病院

医学科 2年 堀江きよみ

例年、夏休みに一度行ってきたぬいぐるみ病院ですが、そこで得られたご縁から、今年度は冬にも実施することが出来ました。

夏のぬいぐるみ病院

8月25日、檀原市内のひかり保育園において行われました。ぬいぐるみ病院では、主に2つの活動をします。「お医者さんごっこ」と「劇」です。お医者さんごっこでは、医学科が医師役、こどもたちが持ってきたぬいぐるみが患者役、こどもたちはその保護者役をします。お医者さんごっこを通して、医療を身近に感じてもらい、病院に対する恐怖心を軽減できるようにするのが狙いです。そして劇では、こどもたち自身の予防医療に関わるテーマを扱います。例えば、今年度なら「手洗い・うがいをしよう!」というテーマで、医学科1年男子2名が扮するドラえもんとのび太くんのドタバタ劇を繰り広げました。このような劇を通じて、自身の健康について興味をもってもらい、地域のこどもたちが正しい生活習慣を付け、自ら健康を推進する一助になればと思います。

今年度代表を務めさせていただき大変恐縮だったのですが、留学のため練習に参加できない日があったり、勘違いから直前まで実施の日を誤認していたりと実に不甲斐ないばかりで、先輩方のご協力なしには無事に終えることは不可能でした。本当に感謝してもしきれません。今回の経験を活かして、来年度の代表さんには練習に必死になるのも大切だが、園との連絡も密に取るように心がけるべきなどのアドバイス等、私が先輩方に支えていただいたようにサポートすることで、先輩方のご恩に報いることができればと思います。

冬のぬいぐるみ病院

1月16日、河合町の河合第二「小学校」にて実施。通常のぬいぐるみ病院は保育園で行うため、小学校での実施はとても新鮮です。どのようなご縁だったのかというと、上記のひかり保育園でのぬいぐるみ病院に参加した園児の保護者さんに、この小学校で教師をされている方がいて、その方のご依頼で小学生版に一部変更したぬいぐるみ病院を行うことができました。主な変更点としては、お医者さんごっこは、小学6年生が医師役・小学2年生が患者役になり、劇は食育や風邪の予防に関するミニレクチャーにという具合です。

日頃、大学生活を送る上で、なかなか小学生と接する機会がなかったため、大学生の自分たちを小学生の皆が素直に受け入れてくれるだろうかなどと事前の練習会で心配したものでしたが、嬉しい事に全くの杞憂で、真摯に取り組んでくれる子ばかりでした。また普段から総合学習の時間に食育をしばしば扱っていると聞いて、こどもたちにとっ

て満足のいく内容だったか気になるところでしたが、いつもの先生と違って、同じ学生の立場から語られることで何か違う視点を受け取ってもらえていればと思います。私達もどうすれば伝えたいことを上手く伝えられるか、見つめなおすことが出来ました。

学祭活動報告

医学科 2年 堀江きよみ

今年度の白檀祭では、10月25日・26日の両日、おしること焼き餅の模擬店を出しました。昨年度の時に肌寒かったため、温かいものが欲しかった憶えからの選択だったのですが、今年は残念ながら見事に予想が外れ、日差しが強く暖かい神無月の暮れに。また、昨年度よりも全体的に甘いものを販売するお店が多かったように感じられました。そのため、絶好調の売り上げというわけにはいきませんでした。沢山のご厚意のおかげで大勢の方に味わっていただくことができました。暑い中わざわざ買ってきてくださった方々には、本当に感謝しきれません。

焼き餅の味付けとしては、きな粉、バターしょうゆ・砂糖醤油などのしょうゆ味、更にはリクエストに応じてこしあんをペーストしたりと、臨機応変にニーズに対応することを心がけました。味付けもそうですが、他にもお店をやっていく上での工夫のいくつかは、一緒にお店を手伝ってくださった先輩や後輩のアイデアです。毎年、社医研の模擬店の指揮は医学科2年がとります。社医研は兼部の方が多いので、より多くの部員の協力が必要になるのは常かもしれませんが、今年は特に先輩・後輩のお力添えが大きかったと思いました。朝の準備・買い出しから一緒に手伝ってくれた先輩や夕方のコンロの掃除を手伝ってくれた後輩、皆さま本当にありがとうございます。また、昨年度に続き今年度も私のピンチヒッターとして駆けつけてくれた近所の幼馴染は間違いなく最強のボランティアです。彼女の業績を他にも紹介すると、模擬店の素敵なポスターもそうだったりします。

おしるこの調理には予想以上に手間暇がかかりました。経時的な衛生状態の悪化を防ぐため、小さなお鍋で何度も作り直しをしたり、またおしるこの中に入れる焼き餅をフライパンで焼くのに時間もかかったからです。そのため、おしるこを買いに来てくださったあるお客様を10分少々お待たせしてしまったこともありました。クッキー売り場のおじさんだったのですが、でき次第売り場までお持ちしますとお声掛けしてもずっとお店の近くで腰かけて待っていてくださり…しかし待ち時間に文句の一つも言わず、後ですれ違った際、「おしるこ、めっちゃおいしかったわ！」と笑顔を向けてくださいました。言い過ぎかもしれませんがこの時は、この人のためだけにでもおしるこを売ったかいがあったなんて本当に思ったものです。こんな感動は普段の大学生活からはなかなか得られないものなので、きっと来年も後輩には学祭活動を続けてほしいですし、もしまた模擬店をするなら、今回の経験を生かして更により良いものにするためにアドバイスできればと思います。

最後になりましたが、頼りない私の統率にもついてきてくれた同輩にも感謝の意を述べたいと思います。支えてくれてありがとう！

あとがき

今年も社会医学研究会の活動報告を作成するにあたって、各活動の代表者の方にご執筆をお願いいたしました。快くお引き受けいただきありがとうございました。新しい活動も増え、各活動の様子を冊子に残すことは、先輩方へのご報告、そして後輩たちへの引継ぎの意味も込めてとても大切なことだと考えています。

社会医学研究会は自分のやりたいことを自由にできる部活です。今年度は短期間ですが、小児病棟の個別指導というボランティアが行われ、エネルギーにあふれた部活だなと改めて感じさせられました。社会医学研究会は本当に色々な人に出会うことのできる部活です。障がいを持った子供たち、ホスピスの患者さんたち、お年寄りの方々、国際的な友達、どれも普通の大学生生活を送っているだけでは得られない出会いだと思います。私も1、2年生の頃ホスピスや花の家に何度か参加させていただきましたが、患者さんやお年寄りの方とお話するのがとてもたのしく、時間があっという間に過ぎてしまいました。初めてお会いする方ばかりなのにすぐに受け入れてくださり、笑顔や笑い声からたくさんエネルギーをいただいた気がします。

今年度は9人もの先輩が卒業されます。とても寂しく感じますが、新たに入部してくれた50人の新入生、そして部員全員で先輩方の作り上げてきた社会医学研究会の伝統を受け継ぎ、さらなる発展を願って頑張りたいと思います。

また、今年度から東医学研究会やNARA Willなど、様々な勉強系のクラブの合同説明会が新入生へ行われることになりました。活動を報告しあって、お互い高めあうためにも新入生だけでなく部員にとってとても良い機会であると思います。社会医学研究会に入部はしたものの、なかなか活動に参加できず、また、どの活動に参加するか迷っているうちに退部してしまう人もおられます。今年からは入部申請を急がず、いろんな活動に参加した後、自分の好きな活動、続けていきたいと思った活動を見つけてから入部していただくようにしたいと思います。先輩として新入生に社会医学研究会の魅力を存分に伝えられるよう努力したいと思います。

私は4月から部長を務めさせていただいておりましたが、テストやアルバイトに追われ、あまり活動に参加できませんでした。ご飯会などで集まりみんなの活動の様子を聞くたびにうらやましく思っていました。残り3年間の学生生活で時間を見つけて活動に参加し、思い残すことなく卒業していきたいと思っております。活動の面ではまだまだ新米ですが、これからもよろしく願いいたします。

最後に、社医研の活動を運営するにあたって、嶋先生はじめ、OB・OGの方々、先輩方、副部長の本橋君、同学、後輩のみなさん多くの方々に支えていただき本当にありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2015年3月

医学科3年 阿部 咲良